

消化器内科における過去 10 年の薬物性肝障害の解析

入江 真, 國本 英雄, 福永 篤志,
四本かおる, 久能志津香, 櫻井 邦俊,
岩下 英之, 平野 玄竜, 上田 秀一,
横山 圭二, 森原 大輔, 西澤 新也,
阿南 章, 竹山 康章, 坂本 雅晴,
岩田 郁, 釈迦堂 敏, 早田 哲郎,
向坂彰太郎

福岡大学医学部消化器内科

要旨：当科外来を紹介受診した薬物性肝障害を対象に、実態を調査し、その特徴を明らかにした。過去 10 年間に、当科外来にて薬物性肝障害と考えられた症例 132 例を対象にした。平均年齢は 57.6 ± 15.2 歳 (18 歳～90 歳)。飲酒歴がある症例は 36.4% であった。基礎疾患に対する併用薬服用症例は 66.7% であった。病型は、肝細胞障害型が 44.7%、混合型が 45.5%、胆汁うっ滞型が 9.8% であり、混合型が多い傾向であった。薬物リンパ球刺激試験 (DLST) の陽性率は 36.8% であった。好酸球増多 (6% 以上) は 25.2% の患者で見られた。薬物性肝障害のスコア DDW-J 2004 薬物性肝障害ワークショップのスコアリングでは、“可能性が高い” に相当する症例が多く認められた。起因薬の種類としては、抗菌剤が 12.5%、消炎鎮痛剤が 9.8%、健康食品によるものも 9.4% あった。肝障害発現までの期間に一定の傾向は認めなかった。治療は、内服薬中止または薬物療法にてすべて症例が軽快した。健康食品などを含め明らかな効果が証明されない薬物は、むやみに服用しない事が重要であると考えられた。

キーワード：薬物性肝障害, 薬物性肝障害スコアリング, 薬物リンパ球刺激試験 (DLST), 好酸球増多